



Club Palette Vol.49

カラーの最前線を歩く Vol.23

4,500色もの顔料や道具、膠などのアート素材を美しく展示 ミュージアムとしての魅力も兼ね備えた寺田倉庫「PIGMENT TOKYO」

天王洲アイルの駅を降りてすぐのビルにある寺田倉庫の「PIGMENT TOKYO(ピグメントーキョー)」。エントランスと内装は隈研吾氏によるもので、竹をはじめとする木材が組まれたデザインが印象的だ。また外から眺めると、壁一面に広がる顔料のカラーヴァリエーションが真っ先に目を引く。

一見何のスペースか?と思うが、ちょっと入ってみたいくなる雰囲気がある。ここは画材ショップでもあり、ミュージアムでもあり、ワークショップ、ラボの機能も兼ね備えたアートの発信地だ。アート素材の魅力余すところなく伝えるこのPIGMENTについて、館長であり、大学で教鞭を執る岩泉慧さんに語っていただいた。

顔料の魅力や素材の良さ、品質の高さを 体験できるアートスペース

—これはすべて顔料なんですね? 壁一面が色の洪水のようで、
ドキドキします。

ここにはおよそ4,500色の顔料が並んでいます。「PIGMENT TOKYO(ピグメントーキョー)」という名称をつけたのも、フランス語の「顔料」にちなみでのことです。

置いている顔料は、品質の良さや希少性にこだわって選び抜いたもので見せ方にもこだわり、ミュージアムのような雰囲気を醸し出しています。ほとんどのものは商品として購入できるのですが、値段はあえて見えないようにして、展示物としての美しさを意識しました。



岩泉 慧さん

寺田倉庫PIGMENT TOKYO館長

美術家/博士号(芸術)

京都造形芸術大学芸術学部美術工芸科専任講師
2015年に絵画表現における膠の使用方法の論文で博士号を取得。PIGMENTや京都造形芸術大学にて膠を基点としたさまざまな画材の研究、指導を行いながら、絵画技法材料の普及活動にも力を入れている。



たくさんの顔料が並ぶ店内

—ショップでありながらミュージアムでもあるんですね。

私たちは、「モノ」をいかに魅力的に見せるかをとっても大事にしています。そういった意味では、置いてある素材が主役。それらを引き立たせるための「展示」の仕方には工夫を惜しみません。ご覧いただくとわかるとおり、単に顔料をたくさん並べるだけではなく、素材の成り立ちや最先端の素材を紹介するために、ガラスケースを用いたり、素材とそれに関わる技法についてパネルやコーナーを使って展示したり、あらゆる方法で技法材料に関する理解を深めようと考えています。



さまざまな膠が展示されている

—PIGMENTは外から覗いてみると、「何の場所だろう?」と興味を引く空間です。創作のための道具類や膠(にかわ)など、とてもたくさん展示されていて、アートをよく知らない人でも楽しめるようになっています。

よく膠は一種類しかない、と勘違いされている方が多く、「膠ってこんなに種類があるとは思わなかった」とびっくりされます。原料には主に食用として食べられる動物の皮が使われていますから、牛や豚、鹿や魚など、実にいろいろな種類があり、ここでしか手に入らないものもあるんです。

道具類もここではたくさん展示されています。

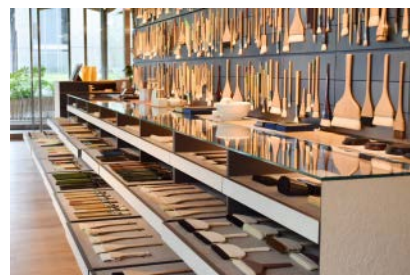
それには理由があって、PIGMENTをつくった目的の一つに、絵画材料に注目し、それを作る職人さんをもう一度リスペクトして認知してほしいという思いがあります。昨今、職人さんの高齢化や後継者不足で絵画材料を作る技術が失われつつあります。PIGMENTはそれを再度見直す場所としても機能したかった。見せ方ひとつで「モノ」の見え方は変わります。職人さんが手をかけて一個一個一生懸命につくったものは綺麗ですから、それらを雑多に並べずに、個々の良さが伝わるように配慮しています。

—墨や硯がたくさん紹介されているのも印象的ですね。

実は200種類を超える古墨がここにはあります。今は作られていない良質の墨も一部在庫していますし、硯も同様に貴重なものがあります。

現在は墨汁が主流になっていて、硯で磨って使う固形の墨は、残念なことには一般的ではなくなってきました。固形の墨は一点一点手作りですので、コストがかかりすぎるため、さらに生産量が減っています。でも、それを作り続けることは日本文化を残すことでもあり、製作している人間のプライドに関わることでもあるのです。私たちは、頑張っているそういう方たちを応援したいので、PIGMENTのスペースでワークショップを開いたりすることで、価値のわかる方に良質の墨を紹介するなどしています。

硯で磨ってこそ、墨本来の色が出せるし、奥ゆかしい色彩表現が可能となるということを多くの方に知ってもらいたいですね。



店内に並ぶ硯や筆

小学校の授業でも、お習字の時間はあるのですが、道具はプラスチックのセット売りで、墨も墨汁、これでは子どもたちに日本文化の奥深さと魅力を伝えることにはなっていません。本式の道具を購入するには保護者の方の負担になるため、そうなっているようです。もし、国の費用を投入できるのであれば、学校に本格的なお習字の道具セットを備え付けにしたいですね。そうすれば、子どもたちも自然と墨や硯に触れる機会が増え、伝統文化の継承にもつながると思うのです。

日本もフランスなどのもっと文化にお金を注ぎ、大事にしていくことを考えていってほしいですね。

色もアートも私たちが思っている以上に身近なもの それを体験型のワークショップや知識を深めるラボで身につける

—ミュージアムやアートショップとしての機能のほかに、

ここではワークショップやラボもよく開催されているんですね。

今日もこれから「水彩絵の具をつくる」という人気のワークショップが始まりますが、「掛け軸をつくる」「岩絵の具」「壁の中のフレスコ画」「伝統技術であそぼう!」「ゴッホスタイルで楽しむはじめての油絵具」「卵絵の具を使って楽しむテンペラ画」等々、さまざまな企画があり、手を動かして体験ができるようになっています。

私たちが接客して画材の良さや道具の素晴らしさを伝えるだけでは、限界があるんです。そこでワークショップを通じて技術や知識を伝えることで、素材の質の良さを実感していただきたいと思っています。



店内の一角でワークショップが行われる

—モノだけでなく、コトも伝えていращやる…。

このスペースにぶらっと立ち寄った方が、たまたまワークショップを見て、「ちょっと私もやってみようかな」と思っただけのことも嬉しいですね。「百聞は一見にしかず」とよく言いますが、手を動かすことで「習うより慣れる」ではないですが、知識がどんどん身につけていきます。

—ラボについてもお聞かせください。

知識をより深めていくために企画しているのがラボで、色にまつわるトークイベントなどを開催しています。一般の方は「色を学ぶ」というと、よくわからないとおっしゃいますが、スーパーで新鮮なお肉の色、見分けられますよね。魚や野菜の色も店頭で見分けています。皆さんお洋服も上手にコーディネートされています。そういった意味で、色はそんなに縁遠いものではありません。トークイベントでは、これまでメイクアップアーティストやアニメーター、美術史の専門家やIT関係者など、さまざまなジャンルの方をお招きして、各々の分野から「色」について語っていただきました。また、今後はアーティストを呼んだイベントも企画していて、色やアートがもっと世の中に広まっていくことを願っています。

ちなみにラボの活動の一環として企業向けにプライベートワークショップを開催しています。特に化粧品業界やファッション業界、自動車業界の方々から、一度色の原点をきちんと知りたい、学びたいということで、ワークショップのオーダーをいただくことが多いですね。

—色って実はずいぶん身近なものなのですね。

色もアートも、私たちが思っている以上に身近なものです。そこをもっともっと伝えていきたい。それが、PIGMENTとしての思いなのです。



色とアートについて話して下さる岩泉さん

アートを中心に置くことで 文化や歴史がすべて繋がるから面白い

—顔料の色が、どうしてその色に見えるのか？それはたぶん、

Club Paletteの読者の方にも、非常に興味深いお話ではないかと思っ
ています。

顔料の色は、同じ素材であっても等級があったり、使い分けがあったりします。メーカーさんによっても色みが違ったり……特に岩絵具は、石の砕き方で色を分けています。砕かれた石の粒子が粗いと色が濃くなり、粒子が細かいと色は薄くなります。これは光の反射によって起こるもので、粒が大きければ大きいほど乱反射は抑えられ、細かければ細かいほど乱反射が起こりやすくなるのです。

でも、それぞれの粒子を顕微鏡で見るとまったく同じ色。そのため光のマジックと言われています。パール顔料という化粧品に使われるキラキラした素材も、同様に光のマジックにより見えている色です。白っぽい中で青みがあるもの、緑がかって見えるものは、どれも光の反射による現象です。いわゆる構造色といわれるオオルリアゲハやコガネムシなどの構造体と一緒に、色素を持っているわけではなくて、光が構造体に入ってきたときにプリズムみたいに分解されて、その一部の色が反射して返ってきて見えているのです。



光を浴びてキラキラ光るパール顔料

—光の反射によるマジックですか…。

はい。いわゆる普通の絵の具は、色をどんどん加えて混ぜていくと黒く濁るんですが、パール顔料の赤とか青とか緑は、どんどん混ぜていくと真っ白になる。パール顔料は、光の三原色なんですね(加法混色)。

絵の具や顔料にはそれぞれ長い歴史があります。中国や西洋にはもともと錬金術や錬丹術というものがあり、金を作ろうとして水銀と硫黄を混ぜたら黄色になった。黄色と銀を混ぜて金色をつくろうと思ったら赤になった。それはとてつもなく鮮やかな赤だったために不老不死の薬と思って、飲んでしまって亡くなられた方も結構いると聞きます。

また、金箔の色で青金と赤金というのがあります。箔にはいろんな種類があるのですが、一般的に金の純度が高すぎると粘りが強くなって扱いにくく、箔にしづらいので、銀や銅を混ぜています。その際に銀や銅の割合が多いと青くなり、逆に純金の割合が高くなると赤くなる。昔の絵巻物では、赤金、青金を素材の性質に合わせてうまく使い分けていました。たとえば青のほうが見えにくく赤は近くにみえるという眼の錯覚があります。

それを利用して、青金は遠景に撒かれ、近景には赤金を使っていました。



光り方の違う華やかな金屏風

—私たちが何気なく見ている襖絵、屏風絵などは、アーティストが素材を知悉し、技法を駆使して描かれているんですね。それを知ると絵の見方が変わりますね。

よく金箔を貼った襖絵を見て、絢爛豪華だという表現をされる方が多いのですが、では何でそこに金色が必要だったのか?実はこの主目的、光源としての金なんです。

つまり、間接照明と一緒にです。今みたいに照明がない時代には、外光に頼らざるを得ないので、お寺の伽藍やお城の中の奥まで光が射し込むようにはどうしたらよいかを考えましたね。そこで金箔が光を増幅してくれるんです。

—権力の象徴だと思い込んでいました…

それもありますが、あくまでも二の次で、どちらかという照明としての役割のほうが重要です。お寺の伽藍では空間を包み込むような形で使われています。そのためか、金箔が使われている部屋は、お客さまを通す応接間とか、みんなが集まって会議をする部屋になっていました。

でも、その他通常の空間・寝室や書斎などのプライベートルームには金箔は使われず、水墨画なんです。

一漆塗りの螺鈿とかももしかすると照明効果を狙って？

そうですね。螺鈿の漆塗りの器って、博物館の光の下で見ると、少ししつこいように感じたりもしますよね？ でもたとえば、夕飯をこの器で和ろうそくのもとで食べたらどうでしょう？ 暗闇の中でほのかに光って、ろうそくの光で揺らめく。当然、まわりの襖絵に描かれた動物たちもまるで動いているように見えます。そういう設計になっているんです。暗闇の中、和ろうそくの光で見る螺鈿の漆器は美しいですね。



ワークショップの準備をするスタッフたち

一いまおっしゃったように、光に配慮した展示がもっとあったら、 アートが魅力的に見えるようになるかもしれませんね。

そういった意味でも、日本の美術は総合芸術なんです。環境も含めた統一的なもので、実は建物や内装、光など、すべてが一緒になった状態で見ることが本来の姿だと思うのです。

芸術って実は一個のことだけで考えてしまうと独立したもののように思えるのですが、実は真ん中に置くことで、すべてが繋がる。

それはどういうことかという、絵を読み解くにあたって、私たちはその絵の歴史を知らないと理解できない。素材は何を使っているかということは化学ですね。構図の比率は？といたら、それは数学的な知識になってくる。描かれたものを文章化しようと思ったら国語力が必要です。それを他の国の人に伝えたいとなったら、語学力も重要になってきますね。

そうなってくると、色々調べないとわからないということになってきます。つまり絵画は幅広い知識を持っていないと解読できないものだともいえます。最終的にはそこに行き着きます。本来アートというのが真ん中にあれば、すべてのものを繋いでくれる。まさにアートは展色剂的、メディウムのな役割を持っていると思っています。

PIGMENTスタッフの多くはアーティストで、技法材料について精通しており、使用者目線からの丁寧な解説を心掛けております。足を運んでくださる人にこのスペースの魅力を存分に伝えられることも強みですね。

公式テキストのここを

Check!!

下記のテキストページに今回のインタビューに関連した内容が掲載されています。

●3級

第8章 混色と色再現

1節 混色の原理

加法混色 p.154~157

第9章 色と文化

1節 日本の色彩文化

各時代の特徴 7) 桃山時代

●2級

第4章 生産者の視点からの色彩

1節 色材の基礎

2顔料 p.144~157